

第1節

調査の目的・経緯 及び対象地域概要

1. 佐渡相川をとりまく現状と文化的景観調査

(1) 文化庁による調査研究における重要地域

平成16年度に文化財保護法の一部改正がおこなわれ、文化的景観という新たな文化財カテゴリーが誕生した。制度発足時より農林水産業に関する文化的景観の調査・選定が進んだ。その後、平成19年からは「採掘・製造、流通・往来及び居住に関する文化的景観の保護に関する調査研究会」が文化庁によって設置され、「保護法に基づいて想定されるすべての対象を文化的景観の観点から分析・評価し、その保存・活用手法を明らかにすること」⁽¹⁾を目的とした検討がなされた。

同調査では、「V. 複合」―「ア. 鉱工業・産業系」として、以下の4つの鉱山・炭田地域が重点地域として位置づけられた。

- ・ 足尾銅山（栃木県日光市）
- ・ 佐渡金銀山（新潟県佐渡市）
- ・ 生野鉱山（兵庫県朝来市）
- ・ 筑豊炭田（福岡県北九州市・飯塚市・田川市・直方市など）

そして、2次調査の結果、佐渡金銀山の場合、西三川砂金山、鶴子銀山、相川金銀山とそこに形成された集落や町並みの一体性が評価された。相川金銀山では、海成段丘によって規定された土地利用の在り方と近世の計画的な町立て、そして他に比類のない大規模臨海鉱山都市形成が評価されることとなった。

(2) 鉱山都市のおかれた社会的環境

鉱山や炭鉱によって成り立ってきた地域は、採掘・製造をおこなっていた時代以来、人口の流入が激しく、様々なひとがやってきて、去っていくという経験をしている。その後、採掘の終焉・撤退とともに、人口は流出の一途をたどり、人口減少と高齢化、また地域の基幹産業の空洞化といった深刻な問題に直面している。

本調査の対象地域でも同様である。第3章において詳

しく言及されるように、明治29年（1896）に三菱合資会社へ払い下げられ、民営化された佐渡鉱山は、三菱の鉱山町として成長を遂げたが、昭和27年（1952）に鉱山の大縮小を迎え、所有していた山林や鉱山病院も旧相川町に譲渡されたことで、都市は縮小へ向かい始める。さらに、平成元年には採掘が停止され、鉱山は休山となり、現在に至っている。

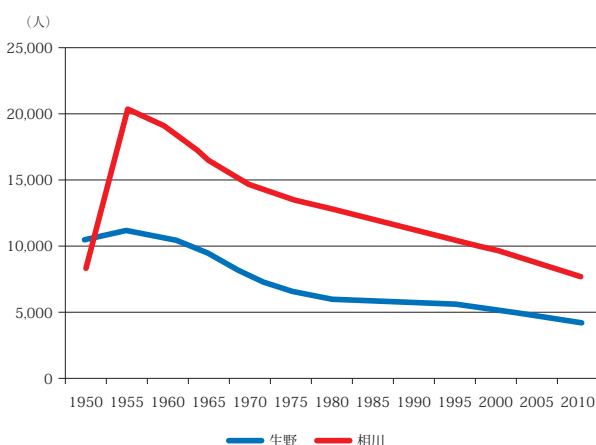


図1-1 佐渡市相川と兵庫県朝来市生野における人口の推移

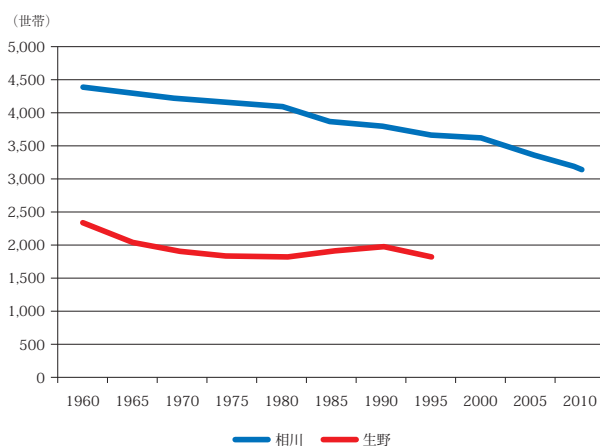


図1-2 佐渡市相川と兵庫県朝来市生野における世帯数の推移

そのなかで、観光地への転換も図られたが、第3章第1節3(2)で言及されるように、1992年をピークとして佐渡全体の観光客数は減少へと転じている。

図1—1、2に示すように、鉾山の衰退と人口減少という問題は本調査の対象地域に限った問題ではない。平成26年3月に重要文化的景観に選定された兵庫県朝来市生野の「生野鉾山および鉾山町の文化的景観」も同様である。しかし、図からも明らかな通り、佐渡相川の人口や世帯数の減少は著しい。

2. 調査の実施と調査対象範囲概要

前項で指摘した状況を踏まえ、相川の鉾山都市景観の文化的景観としての価値を仔細に分析し、それを活かした地域づくりを推進することで、地域の新たな活力につながることを目的とし、佐渡市では世界遺産推進課を中心に、平成22年度から25年度にかけて4カ年事業として、佐渡市相川地区において「佐渡相川の文化的景観保存対策調査」を実施した。

佐渡市ではすでに平成23年9月に「佐渡西三川の砂金山由来の農山村景観」が国の重要文化的景観に選定されており、本地区の保存対策調査はそれに続くものとして位置づけられる。加えて、佐渡市及び新潟県では世界文化遺産登録を目指した取組も続けられており、「金を中心とする佐渡鉾山の遺産群」として国連教育科学文化機関(UNESCO)の世界遺産暫定一覧表にも記載されている。文化的景観の取組は、世界遺産登録に向けた取組とも連動したものとして位置づけられる。

さて、調査は平成22年度～24年度にかけて、景観、都市構造、建築、生業、植生等の調査を実施し、平成25年度は補足調査及び報告書作成をおこなった。また、調査にあたっては学識経験者による「佐渡金銀山調査指導委員会(文化的景観専門分野会議)」(篠原修代表、第2節参照)を組織し、価値評価のための検討を進めた。

当初、鉾山及び町場に焦点をあて、主として都市構造と建築という2つの観点からの調査を進めてきたが、調査を進めるなかで調査範囲南部に位置する鹿伏及び北部に位置する下相川という農漁村にも視点を広げ、鉾山都市の社会システムについて検討をおこなった。その結果、鉾山を支えた食料供給源のひとつとして両地区が位置づけられ、鉾山都市システムにおける海成段丘上に形成された農地の重要性を確認することができた。特に鹿伏においては現在も耕作が継続されており、生活・生業という側面から有する価値は高い。

しかし、こうした厳しい社会的環境のもとでも、鉾山操業期を知る地域住民は鉾山都市であった相川に誇りを抱いている。そして、その誇りは生産の場である鉾山に対してだけではなく、居住の場である町場における特徴的な景観(石垣、小路、坂道等)に対するものでもある。

したがって、こうした景観を世代を超えて継承していくことは、地域の重要な文化アイデンティティとなるだけでなく、現在の地域社会における重要な活力にもなりうると思われる。

また、こうした調査範囲の広がり の結果として、調査範囲内の空間の関係性も明らかになってきた。このように、鉾山を中心とした文化的景観であるという事実は当初から自明のものであったが、そのなかで地域に内在される空間・景観の多様性とその関係性が如実に明らかになったことが今回の保存対策調査の顕著な成果である。こうした空間・土地利用と人間活動の関係性は、佐渡相川の鉾山都市景観の基層的価値でもある。

本報告書では、以上のような保存対策調査を通じて明らかとなった佐渡相川の鉾山都市景観に関する調査成果及び価値評価を報告するものである。

調査にあたっては、南北方向では南部の鹿伏地区(農地)から北部の吹上海岸(石切場)、東西方向では西側の海岸部から東側の大立地区(堅坑)までを対象とした(図1—3)。これらの地域は相川町(2003年に佐渡市に合併、現相川地区)の中心部にあたり、相川地区全体の平成22年現在の人口は7,733人である。

調査対象範囲内には、鉾山に関連する国指定史跡及び国指定重要文化財が存在するほか、吹上海岸は国指定名勝となっている。しかし、そうした諸要素や鉾山都市に由来する集落を含めた地域全体が一体となって保存・活用されていくための取組はこれまでほとんどおこなわれてこなかった。しかし、本節冒頭で取り上げたような過疎・高齢化を中心とする地域の抱える課題を解消に近づけ、文化を基盤としたよりよい地域社会の形成に寄与していくためには、近世以来の鉾山都市という社会的特性を明らかにし、そうした文脈のなかで地域資源の保護・継承を図っていくことが不可欠である。

今後は、今回の調査で明らかになった成果を活かしつつ、文化的景観の保存及び普及啓発への取組を軸として、これらを有機的に結びつけ、地域の歴史文化の継承に資する展開を目指していくことが求められる。

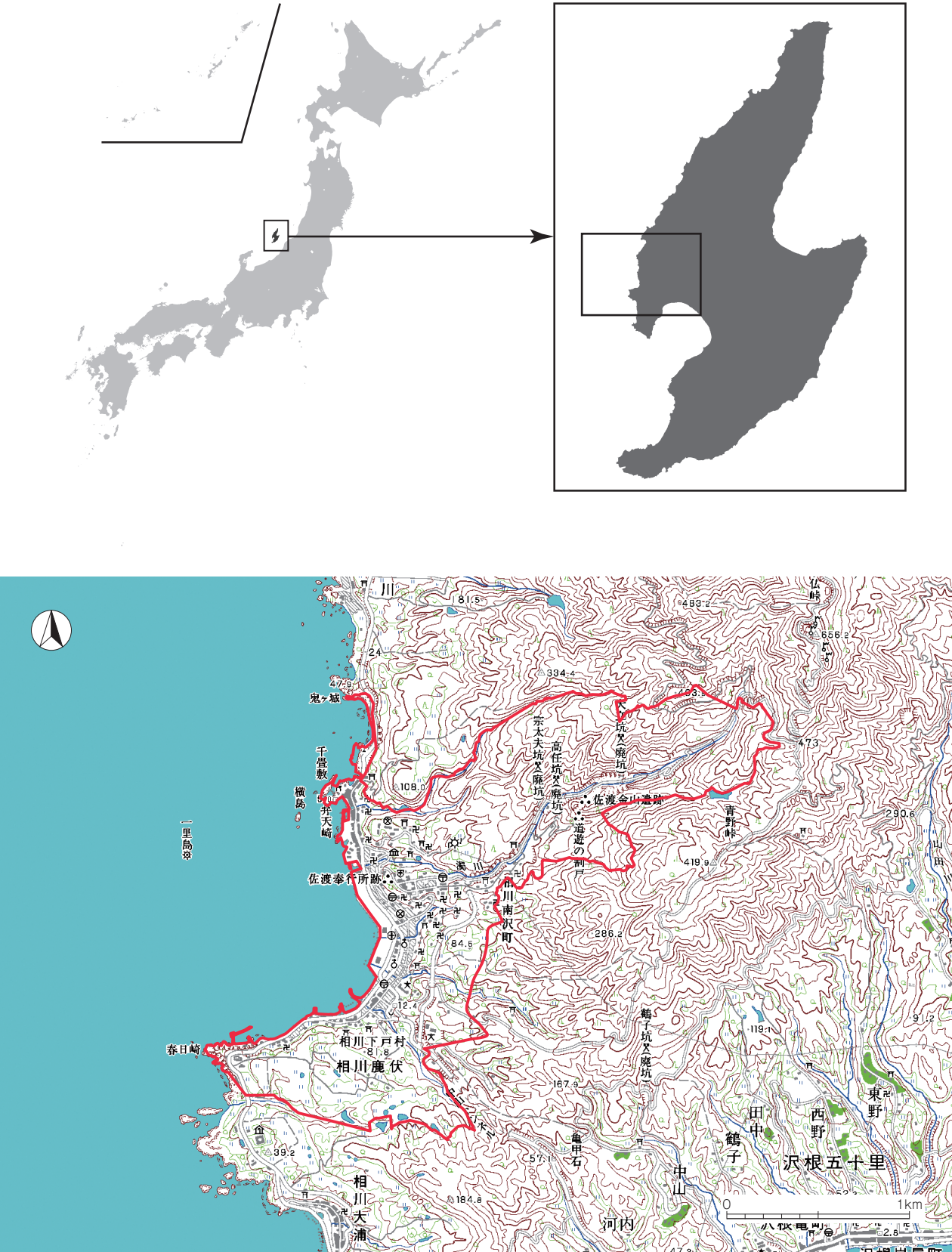


図1—3 調査対象地域の位置及び範囲

第2節 調査体制及び報告書の構成

1. 調査体制

平成22～25年度にかけて実施した佐渡相川の文化的景観に関する価値調査は、佐渡市世界遺産推進課が事務局となり、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室（以下、奈良文化財研究所景観研究室）へ、文化的景観の本質的価値及び調査全体のとりまとめを委託して実施した。

また、調査は同研究室への委託に加え、京都府立大学大学院生命環境科学研究科史的住環境学研究室（大場研究室）、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、新潟大学大学院現代社会文化研究科堀研究室、同大学院自然科学研究科岡崎研究室内の協力を得て実施した。

なお、本事業は平成22～25年度文化財国庫補助事業（文化的景観保護推進事業）を受けて実施したものである。

また、あわせて、かねてより設置されていた「佐渡金銀山遺跡調査指導委員会（文化的景観専門分野会議）」（代表 篠原 修）において、調査方針等について学識経験者による審議をおこなった。本調査にかかる委員会、調査員、事務局は以下のとおりである。

○ 佐渡金銀山遺跡調査指導委員会

（文化的景観専門分野会議）

代表 篠原 修（東京大学名誉教授）
委員 池田哲夫（新潟大学人文学部教授）
伊藤 毅（東京大学大学院工学系研究科教授）
大熊 孝（新潟大学名誉教授）
岡崎篤行（新潟大学工学部教授）
田中哲雄（前東北芸術工科大学教授）
福井恒明（法政大学デザイン工学部都市環境デザイン学科教授）
堀 健彦（新潟大学人文学部准教授）
益田兼房（文化財建造物保存技術協会客員研究員）

山本修巳（佐渡市文化財保護審議会会長）

（代表を除く委員は五十音順に表記）

○ 調査員

奈良文化財研究所文化遺産部景観研究室

前室長 清水重敦（～平成24年度）

室長 平澤 毅（平成24年度～）

研究員 恵谷浩子（平成22年度～）

前特別研究員 松本将一郎（～平成24年度）

特別研究員 菊地淑人（平成24年度～）

文化遺産部遺跡整備研究室

特別研究員 大平和弘（平成25年度）

京都府立大学大学院

生命環境科学研究科環境科学専攻

教授 大場 修（平成22年度～）

学術研究員 郭 雅雯（平成23年度）

学術研究員 中西大輔（平成25年度）

大学院生 辻 晶子（平成22年度）

大学院生 檜垣友映（平成22～24年度）

大学院生 松崎 渚（平成22～24年度）

大学院生 渡邊綾香（平成22～24年度）

大学院生 宮下 浩（平成23年度～）

大学院生 今井隆平（平成23年度～）

大学院生 呉 昱瑩（平成23年度）

大学院生 古 瑩子（平成23年度）

大学院生 松尾康弘（平成22年度）

大学院生 野口貴弘（平成23年度）

学部生 河野 裕（平成22年度）

学部生 山下 恵（平成23年度）

学部生 香西優志（平成23年度）

学部生 杉山祐里沙（平成23年度）

学部生	奥田侑希（平成25年度）	学部生	細田翔太（平成23年度）
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻		学部生	和田優子（平成23年度）
助教	初田香成（平成23年度～）	学部生	安食裕貴（平成24年度）
研究員	ケン・オオシマ・タダシ （平成24年度～）	学部生	阿部雅之（平成24年度）
学術支援専門職員	松田法子（平成23年度～）	学部生	岩渕太一（平成24年度）
大学院生	高橋元貴（平成23年度～）	学部生	下山孝暁（平成24年度）
大学院生	福村任生（平成23年度～）	京都大学	
大学院生	奥原 徹（平成23年度～）	大学院文学研究科	
大学院生	光永理人（平成23年度～）	大学院生	鈴木隆志（平成24年度）
大学院生	八賀俊一郎（平成23年度～）	大学院人間・環境学研究科	
大学院生	中尾俊介（平成24年度～）	大学院生	幅 亮太（平成23年度）
大学院生	松本純一（平成24年度～）	東京農業大学	
新潟大学		大学院農学研究科	
大学院自然科学研究科・工学部		大学院生	渋谷翔夢（平成22年度）
大学院生	大庭裕雅（平成22年度）	○事務局	
大学院生	柴嶺高行（平成22～23年度）	佐渡市世界遺産推進課	
大学院生	間諺祐太（平成23年度）	課長	北村 亮（平成22年度）
大学院生	斎藤隆資（平成23年度）		羽下三司（平成23年度）
大学院生	江村香里（平成23年度）		高橋則夫（平成24年度）
学部生	塩谷友朗（平成23年度）		石山 勉（平成25年度）
大学院現代社会文化研究科・人文学部		課長補佐	濱野 浩（平成22～24年度）
大学院生	王 鈺軒（平成23年度）		下谷 徹（平成25年度）
学部生	五十嵐美都（平成23～24年度）	係長	下谷 徹（平成22～24年度）
学部生	黒田彩乃（平成23～24年度）		川村 尚（平成25年度）
学部生	野呂田健太郎（平成23～24年度）	主任	市橋哲史（平成22年度）
学部生	橋本 瑛（平成23～24年度）		若林篤男（平成22年度～）
学部生	星野 貢（平成23～24年度）	学芸員	山口由加利（平成25年度）
学部生	丸山朋樹（平成23～24年度）	新潟県教育庁文化行政課世界遺産登録推進室	
学部生	安食裕貴（平成23年度）	政策企画員	小田由美子（平成22年度～）
学部生	北林佳奈（平成23年度）	専門調査員	渡邊裕之（平成25年度）
学部生	佐藤 彩（平成23年度）		（所属及び肩書きは参加最終年度末のものである）

2. 報告書の構成

第2章では、文化的景観形成の基盤となった佐渡相川の自然・文化・社会的な環境について明らかにすることを目的とし、地質的、生態的側面からの自然的基盤と歴史社会学的側面からみた社会の変遷について論じる。

第3章では、報告の端緒として佐渡相川の歴史を、特に金鉱山及び鉱山採掘と人間社会の関係性という観点から俯瞰し、佐渡相川の歴史的特質及び鉱山都市における社会構造・システムの形成と実態について通史的に明ら

かにする。一連の作業は、社会的機能の多様性、そして職業構成を含む社会構造の複雑性について検討することで、「都市」としての相川の社会像を提示するものである。

加えて、鉱山都市における伝統工芸や信仰について、現代との関係性も交えて検討をおこなった。鉱山と密接なかかわりを有する祭礼の継承など、今に生きる鉱山都市の実像を明らかにする。

以上の検討は、第4章以降で論ずるフィジカルな都市

像を支える重要な歴史的・文化的文脈を提示し、また佐渡相川の基層にもとづく地域特性を描き出すことにもつながるものとして位置づけられた。

第4章では、鉾山都市相川での土地利用・空間利用の在り方とその関係性について分析をおこない、土地、社会、自然の関係について検討する。つまり、町場・農漁村を問わず、海成段丘が相川の土地利用を規定していることを明らかにする。また、町場を食料供給という点で支えた農地の歴史的展開について検討し、鉾山都市社会との結びつきを検討する。加えて、地域内の多様な地区や要素が、歴史的に一貫して同様の使われ方をされ、関係性をもってきたことを論ずる。こうした検討を通じて、文化的景観としての空間利用及び空間の関係性の特質を提示する。

第5章では、海と山に挟まれた狭隘な土地に生み出された鉾山都市の変遷と構造を都市史の観点から読み解く。つまり、鉾山都市相川の成立過程において、どのように町割が施され、都市が形成されていったのかについて、絵図や文献史料、実測調査等の成果を踏まえて論ずる。一連の分析を通じて、初期町立としての「上相川」、そして上相川に続いて成立した「上町」及び「下町」、加えて信仰空間としての「寺町」における土地構造、土地利用について明らかにする。また、分析のための重要な視座のひとつとして、石造物の利用と分布についても検討をおこなった。

第6章では、鉾山や流通によって形成された鉾山都市相川において、特徴的な景観構成要素である町並みや建造物に注目し、建築史的観点を中心に検討をおこなった。そこでは、鉾山都市における町並みが、職種や階層に応じた建物という特徴に加えて、第5章で明らかにされた石造物の利用も含む敷地造成の在り方、また職業や階層と居住地域の分布特性等のなかで形成されていったものであることが明らかとなった。また、鉾山に惹きつけられるかたちで様々なひとが往来した結果、建物にも京都などの影響が認められると位置づけられ、こうした点にも鉾山都市としての特徴が現れている。

第7章では、第2章から第6章までの検討を踏まえ、佐渡相川の鉾山都市景観における景観構造及び景観構成要素について検討をおこない、調査成果をまとめていく。加えて、本調査及び調査指導委員会における議論を通じて明らかとなった文化的景観としての本質的価値についてまとめ、報告書の結びとする。

本報告書における各章・節等の分担執筆者は以下のとおりである。執筆者の所属・肩書は1に記した調査体制

において記載のない場合のみ記す。

第1章	奈良文化財研究所景観研究室 佐渡市世界遺産推進課
第2章第1節	恵谷浩子
第2節	渡邊裕之
第3節	北條睦夫 (佐渡市文化財保護審議委員)
第4節	菊地淑人
第3章第1節	
1. (1)	小田由美子
(2) (3)	余湖明彦 (新潟県世界遺産登録推進室)
コラム	大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館)
2. (1)	濱野 浩 (佐渡市世界遺産推進課)
(2)	余湖明彦
(3) (4)	濱野 浩
(5)	小林祐玄 (佐渡市教育長)
(6)	本間滯子 (佐渡市世界遺産推進課)
(7)	若林篤男
3. (1)	山本修巳
(2) (3)	菊地淑人
第2節	
1. (1) (2)	柳平則子 (新潟県文化財保護審議委員)
2 (1)	池田哲夫
(2)	菊地淑人
(3)	若林篤男
第3節	奈良文化財研究所景観研究室
第4章第1節	堀 健彦
第2節	恵谷浩子
第3節	恵谷浩子
第4節	奈良文化財研究所景観研究室
第5章第1節	
1.	伊藤 毅
2. (1)	宇佐美亮 (佐渡市世界遺産推進課)
(2)	清水重敦
3.	高橋元貴
第2節	
1. (1)	福村任生

	(2)	初田香成
2.	(1)	八賀俊一郎・初田香成
	(2)	中尾俊介
	(3)	八賀俊一郎
	(4)	松本純一
	(5)	初田香成
3.		奈良文化財研究所景観研究室
第3節		奈良文化財研究所景観研究室
第6章第1節		
1.	(1)	岡崎篤行・大庭裕雅
	(2)	山口由加利
2.	(1)	大場 修
	(2)	山崎完一
		(株式会社グリーン・シグマ)
第3節		奈良文化財研究所景観研究室
第7章		奈良文化財研究所景観研究室

なお、本報告書は文化的景観保存対策調査によって明らかとなった成果を踏まえ、佐渡相川の鉾山都市景観の本質的価値を位置づけていくものであるが、調査の最終的な到達点ではない。今後、官民一体となった価値の共有の過程を通じて、近現代の鉾山都市の記憶をもとに一層文化的景観としての価値を深めていくことが求められる。

また、本章冒頭で指摘した「採掘・製造、流通・往来及び居住に関する文化的景観の保護に関する調査研究

会」の報告書のなかでは以下のような指摘がなされている。

文化的景観の整備において最も難しいのは、景観が生み出す一体性の価値と個別建造物における真実性の価値との調整である。建造物の修理事業が一定の時代に比重を置きすぎると、「景観の重層性」や「景観の一体性」をそこあう場合が生じる。この調和に関する判断は、ウィーン・メモランダムが述べる「地域的・景観的文脈」への配慮と、その本質的価値の見極めに基づいて行われなければならない。

例えば、本報告書第6章及び第7章で指摘するように、佐渡相川の鉾山都市景観の本質的価値の一端は家屋を中心とした鉾山都市由来の建造物によって規定される。したがって、現在まで継承されてきた家屋の特徴は重要な景観構成要素でもある。

こうした建物や町並みについて、今後いかに保護を図っていくべきかについては、今回報告された調査成果を起点に、今後、生活・生業の観点から一層の調査が実施され、文化的景観としての価値がさらに深められていくことが期待される。特に、鉾山都市の生活と家屋利用の関係性は、価値の機軸ともいえる事項であり、今後のさらなる調査の進展が求められている。

第3節 調査検討過程

1. 調査指導委員会における議論

各調査は、「佐渡金銀山遺跡調査指導委員会（文化的景観専門分野会議）」における検討を踏まえておこなわれた。同委員会における佐渡相川の文化的景観の価値調査に関する議論は全12回実施され、文化的景観の本質的価値の評価に向けた議論が実施された。各回の委員会における文化的景観の価値評価に関する検討過程は以下のとおりである。

□ 第1回：平成22年8月10日

調査範囲の設定について、資料説明及び議論がおこなわれた。埋立地も含めた調査をおこなうことや農地（鹿伏）の調査の重要性とその資料的限界などについて意見が出された。

□ 第2回：平成22年11月19日

調査の進捗状況について説明がおこなわれた。相川の流通往来の在り方について、特に奉行所が成立した17世紀に注目して調査を展開すべきだという意見が出された。

□ 第3回：平成23年3月7日

大場修（京都府立大学）より、京都府立大学が担当している建物調査の成果と今後の方向性について説明がおこなわれ、上町と下町の町屋の違いなどについて議論がなされた。

また、清水重敦（奈良文化財研究所）より、奈良文化財研究所における調査の全体像及び次年度の調査計画等が説明され、地形の断面で都市を捉えていくことの重要性や調査手法について述べられた。

委員からは、墓石の分布などにも着目し、歴史が凝縮された空間であることが読み取れるような調査にすべきという意見が述べられた。上相川から現在の町への変遷について都市的な観点からの検討が必要だという意見も出された。

□ 第4回：平成23年7月26日

現在の調査の進捗について事務局より報告された。

また、堀委員から新潟大学で担当する土地利用調査について、地目上と現状の土地利用の齟齬を確認し、どのように変化してきたのかということをも明らかにしていくことが示された。

清水重敦からは、奈良文化財研究所の調査について、引き続き景観構造・都市構造という観点から調査を進めていることが示された。都市の変遷については、東京大学伊藤研究室と共同で調査し、特に都市形成とインフラについて、各町々をゾーニングして特徴を明らかにすることで、保存計画策定への貢献を視野にいれた調査を実施するという方向性が述べられた。

□ 第5回：平成23年11月30日

事務局より調査の進捗状況説明がおこなわれた。

また、清水重敦より、平成17～18年におこなわれた上相川のテラス調査の図に明治の地籍図を重ねた結果、ほとんど現地形と変わらずに地割が残っていることが明らかになったと説明された。また、鹿伏の農地調査成果について、ため池は大正期のものであり、農地の形状は変わっているが、田越しの水路など、江戸初期の古い形態が残っているものもあることが明らかになったと説明された。

委員からは、海成段丘上の変化が大きいことに対し、何の変化が大きいのかという質問が出され、調査を担当した堀委員より、圃場整備による変化が大きく、むしろ圃場整備されていない場所が重要であるという回答が示された。

鹿伏の農地について、江戸時代は現在より耕地面積が狭かったのかという質問がおこなわれ、清水重敦より現在の3分の1程度であったと回答がなされた。

町場の石垣について、類型化や地形との関連性等を検

討してはどうかという提案が出され、今後検討していくこととなった。

□ 第6回：平成24年2月29日

調査の進捗状況について、清水重敦、伊藤委員、事務局より説明がおこなわれた、

委員会では、各組織の調査成果について議論をおこなう場を設ける必要性が提案され、次年度の早い段階で設けることを検討している旨、事務局より説明がなされた。

□ 第7回：平成24年5月31日

文化的景観の価値付け及び選定基準について事務局から説明がおこなわれた。また、清水重敦より、水田については、相川の町場、鉾山との関係から考え、評価すべきものとして調査を進めているが、選定の時点で入れるか入れないかを議論してほしいことが説明された。

各委員からは、港湾及び水路について意見が述べられ、海岸部を範囲に位置づけていくべきとされた。

□ 第8回：平成24年12月4日

文化的景観の選定申出範囲及び価値、構成要素について、事務局及び恵谷浩子・菊地淑人（奈良文化財研究所）より説明をおこなった。このなかで、「金銀山と交易と観光が育んだ社会」のうえに成り立つ3つの価値として「都市として成長した臨海鉾山」「二元構造の生成と持続」「産業・生業と自然環境の有機的關係」を提案した。

委員からは、「二元構造」について年代順に整理する必要性や下町の埋立てへ着目することの重要性が述べられた。加えて、価値のひとつとして廻船に注目することも重要だとされた。

また、「交易」ということばについて、歴史的には限定された言葉になるので、「流通」のほうがふさわしいのではないかという意見が出された。

鹿伏の農地についても、相川全体のなかでの位置づけられ、その価値について議論がおこなわれたほか、「農村」ではなく「農漁村」として景観単位を位置づけていくべきであるという意見が述べられた。

□ 第9回：平成25年3月27日

伊藤委員、大場修、恵谷浩子から東京大学、京都府立大学、奈良文化財研究所における各調査成果について説明がおこなわれた。

□ 第10回：平成25年6月11日

文化的景観の選定申出範囲及び価値、構成要素等について事務局及び菊地淑人より説明をおこなった。

委員からは、近世以降の下町の空間構造については、交易・商業から商業・観光への変化とするのは、少し無理があるのではないかという指摘がなされた。

また、近代以降をひとつに捉えていくことの限界があり、鉾山の大縮小以降をもうひとつの時代として考えていくべきという意見も示された。

□ 第11回：平成25年10月21日

報告書の章構成と本質的価値の関係性及び章立てについて菊地淑人より説明をおこなった。

□ 第12回：平成26年3月26日

調査報告書における本質的価値の記述（本書第7章）について事務局より説明をおこなった。

2. 価値調査の過程

委員会における審議もふまえて、奈良文化財研究所景観研究室、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻伊藤研究室、京都府立大学大学院生命環境科学研究科史的住環境学研究室（大場研究室）、新潟大学人文学部堀研究

室、新潟大学大学院自然科学研究科工学部岡崎研究室では、景観、都市構造、建築、生業、植生等の調査及び写真撮影を実施した。具体的な現地調査は表1―1のとおりである。

表1―1 現地調査一覧

2010年8月7日～13日	都市構造調査	清水重敦、松本将一郎
	植生調査	恵谷浩子、渋谷翔夢
2010年8月22日～26日	家屋調査	大場修、松尾康弘、辻晶子、檜垣友映、松崎渚、渡邊綾香、河野裕、大庭裕雅、柴嶺高行
	生活・生業関連調査	松本将一郎
2010年11月8日～11日	生活・生業関連調査・都市構造調査（地形断面）	清水重敦、松本将一郎
	植生調査	恵谷浩子
2011年3月2日～7日	石造物調査、生活・生業関連調査	清水重敦、松本将一郎
2011年7月8日～10日	都市構造調査	伊藤毅、松田法子、初田香成

2011年7月15日～18日	家屋調査	大場修、郭雅雯、檜垣友映、香西優志、杉山祐里沙、間館祐太、斎藤隆資、松本将一郎
2011年7月24日～29日	都市構造調査（地形断面）・景観構成要素調査	清水重敦、松本将一郎、奥原徹
	土地利用変遷調査（農地）	恵谷浩子
2011年9月7日～9日	土地利用調査（上町）	堀健彦、王鈺軒、星野貢、橋本瑛、五十嵐美都、野呂田健太郎、黒田彩乃、北林佳奈、丸山朋樹、安食裕貴、佐藤彩、細田翔太、和田優子
2011年9月11日～13日	家屋調査	大場修、呉昱瑩、古瑩子、檜垣友映、渡邊綾香、宮下浩、杉山祐里沙、柴嶺高行、塩谷友朗、江村香里
2011年9月24日～28日	都市構造調査（街区調査：相川紙屋町、相川炭屋町、志川大間町、相川濁川町）	伊藤毅、松田法子、初田香成、高橋元貴、福村任生、奥原徹、光永理人、八賀俊一郎、松本将一郎
2011年10月7日～8日	家屋調査	大場修、檜垣友映、宮下浩、杉山祐里沙、今井隆平、野口貴弘、山下恵
2012年2月27日～3月4日	土地利用変遷調査（農地）・石造物調査	恵谷浩子、幅亮太
2012年7月12日～15日	家屋調査	大場修、檜垣友映、松崎渚、渡邊綾香、宮下浩
2012年7月13日～15日	石造物調査	清水重敦、恵谷浩子、鈴木隆志
2012年7月14日～17日	都市構造調査（街区調査：相川中京町、相川米屋町、夕白町、四十物町及び相川五郎左衛門町、相川三町目、相川三町目浜町）	伊藤毅、ケン・オオシマ・タダシ、松田法子、初田香成、高橋元貴、福村任生、光永理人、八賀俊一郎、中尾俊介、松本純一
2012年9月3日～6日	土地利用調査（下町）	堀健彦、野呂田健太郎、丸山朋樹、安食裕貴、星野貢、五十嵐美都、橋本瑛、黒田彩乃、阿部雅之、岩渕太一、下山孝暁
2013年1月15日～18日	石造物調査、生活・生業関連調査	恵谷浩子、菊地淑人
2013年7月3日～5日	全覧図作成調査	菊地淑人、大平和弘、北野陽子
2013年9月5日～6日	大判写真撮影事前調査	菊地淑人、杉本和樹
2013年10月7日～11日	大判写真撮影	菊地淑人、鎌倉綾、杉本和樹
2013年10月19日	祭礼調査（相川祭）	菊地淑人
2013年11月4日	家屋調査	大場修、中西大輔、宮下浩、今井隆平、野口貴弘、奥田侑希
2013年11月11日～14日	集落調査、古写真資料調査	山口由加利、菊地淑人
2014年3月11日	写真撮影	菊地淑人

第4節 本書で使用する語

本節では、本報告書の前提として共有すべき語とその意味について提示する。第2章以降の前提として参照されたい。

□ 相川の表記について

「相川」を冠する地名は、江戸時代以後、明治、昭和、平成の市町村合併によってその範囲が変化しており、一律に表記することはできないので、原則として以下のように整理して表記することとした。

相川－江戸時代の相川各町の総称

旧相川町－明治22年～昭和29年までの相川町（明治34年に二見村鹿伏と金泉村下相川を編入）

相川町－昭和29年～平成16年までの相川町

相川地区－平成16年以降、佐渡市となった現在において合併前の相川町を指す。

相川市街地－相川地区のなかの鹿伏・相川各町・下相川を含む地域（文化的景観対象範囲）

□ 上町・下町

第2章第1節及び第5章で指摘するように、相川は海成段丘を巧みに利用して形成された地域である。そのなかで、Ⅷ及びⅨ面にあたるのが上町、Ⅺ面にあたるのが下町である。例えば、巻頭図版Aでも、下町が海岸線にそって低位に位置し、上町はその上段に広がっていることが確認できる（図1－4）。

□ 鉾山都市

本報告書で「鉾山都市」と述べる場合、その範囲は図1－3に示す価値調査範囲全域である。鉾山や鉾山関係者が多く居住した地区（上町）だけでなく、鉾山採掘や鉾山関係者の生活を支えた商業の町、近郊の農漁村など

も含んだ範囲となる。第7章で提示するように、相川はこうしたシステムの存在が重要であり、「鉾山都市」及び「鉾山都市景観」はそうした全体性を示す語である。

なお、本文中では便宜上「鉾山都市」という語を使用することとし、相川が「都市」であるかどうかについては、第2～6章の内容をもとに、第7章において佐渡相川の鉾山都市景観の本質的価値を検討するなかで改めて議論する。

□ 鉾山町

「鉾山都市」が価値調査範囲全域を示すのに対し、本報告書において「鉾山町」として記す場合、それは鉾山関係者が多く居住した地区（上町）のみを示す。換言すれば、それは鉾山採掘をとりまく小さなシステムといえるものである。（奈良文化財研究所景観研究室・佐渡市世界遺産推進課）

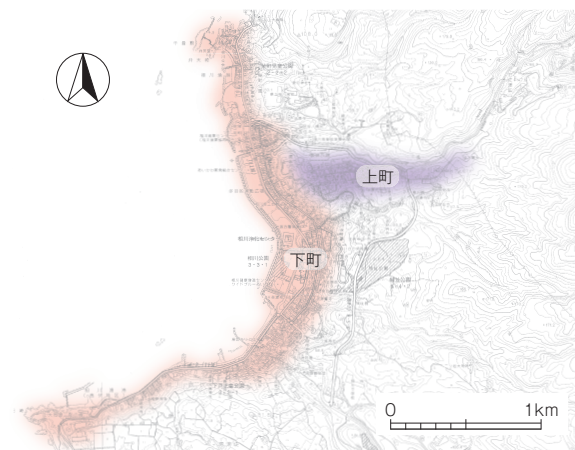


図1－4 佐渡相川における上町と下町